
炎の王

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の王

【Nコード】

N2557P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ラグナロクに対峙するフレイとスルト。両者が語り合うこととは。北欧神話の最後の場面を題材にした作品です。

第一章

炎の王

紅蓮に包まれた巨人だった。髪も髭も炎であり身体は灼熱の色だ。その巨大な姿を見せてだ。彼はそこにいた。

この世の全てが息絶え燃えようとしている。巨人は今一人の男と対峙していた。

右手に鹿の角の武器を持っているこの男は見事な金髪に青い澄んだ目を持っている。顔は白く目元は涼しく眉の形は細く長く切れている。

口は紅で小さく鼻が高い。見事な美男子である。

男はだ。こう巨人に言うのだった。

「スルトだったか」

「如何にも」

巨人はその通りだと答えたのだった。

「それが我が名だ」

「そしてその剣は」

その巨人スルトが左手に持っている剣を見た。これまた炎の色でありしかも燃え盛っている。男はその剣を見て言うのであった。

「レーヴァテインか」

「全てを知っているな」

「知らない筈がない」

「そうだと返すのだった。」

「この世の全てを焼き尽くす剣のことはな」

「そうか、ではだ」

「何だ」

「フレイよ」

スルトは男の名前を呼んだ。

「虹と豊穡の神よ。貴様に問う」

「それでここにいるのか」
「私がここにいるのはこの世界を無に返す為」
「その為だというのだ。」
「貴様を滅ぼす為ではない」
「私に去れと言うのか」
「それは言わない」
「違うというのである、それとはだ。」
「私は戦うことについてはやぶさかではない」
「それについてはか」
「そうだ、炎の巨人は戦いを拒むことはない」
「彼はまた言った。」
「だからだ。それはいい」
「そうか」
「しかしだ」
「このことを話してからだ。またフレイに対して話すのだった。」
「貴様は何故ここに残っている」
「まだそのことを問うのか」
「この世界は貴様が本来いる世界ではない」
「スルトはこんなことも言ってきた。」
「違うか」
「私はだ」
「うむ」
「ヴァン神族だ」
「それだというのである。」
「確かにアース神族とは違う。ここを治めていた者達とはな」
「そうだな。では戦う理由はない筈だ」
「スルトはそれを理由としてきた。」
「ましてや。貴様のあの剣」
「勝利の剣か」
「あれがないのだぞ」

「確かにな」

「あの剣は貴様に確実に勝利をもたらした」
「今はないその剣のことも話された。」

「例えば私であろうともだ」

「誰であろうが勝利を収める」

「その通りだ。貴様にはそれが無い」

「つまり私が負ける」

「その鹿の角では私には勝てはしない」

その鹿の角を見てだ。フレイにさらに言った。

「貴様は間違いなく敗れることになる」

「そうかも知れない。だが」

「それでも戦うか」

「その通りだ。私は戦う」

あくまでこう言っ下がるうとしない。その目には確かな意志があつた。

第二章

そのうえでだ。彼は鹿の角を構える。何があるかと引かないつもりだった。

スルトはそれを見てだ。また言った。

「だからだ。何故そうする」

「戦うその理由か」

「何故だ」

また言うのだった。

「それは何故だ」

「私はだ」

その理由をだ。遂に話すのだった。

「確かにアース神族ではない」

「そうだな。それでも戦うのは何故だ」

「私は彼等と共にいた」

そのアース神族と、というのだった。

「その時は実に長いものだった」

「それはその通りだな」

「その長い時を共に過ごしてきた」

「彼等に心が移ったか」

「そうだな。その通りだ」

まさにそうだと言っていてであった。あらためて身構えてみせた。

そしてそのうえでだ。こう話すのだった。

「彼等と共に生き。共に戦い」

「そして共に死す、か」

「私の願いはそれだ」

まさにそうだと言うのだった。

「それがだ」

「わかった、それではだ」

「貴様も戦うのだな」

「その通りだ」

「仲間、か」

スルトは言った。

「だからだな」

「そうなるだろう。ではいいな」

「うむ」

巨人は彼のその言葉に頷いた。そうしてだった。

燃え盛る炎の剣を振りかざす。スレイも角も構えた。

二人の戦いがはじまった。世界に残るのは二人だけだった。

その戦いの果てにだ。遂にだった。

フレイはだ。動きを止めたのだった。

「うつ・・・」

「炎にやられたな」

「やはり。私は」

「これで滅びるのだ」

そうなるというのだった。

「貴様がこの世界で滅びる最後の者だ」

「この世界は」

「消える」

スルトは言った。

「完全にだ」

「そうなるか」

「安らかに眠れ」

その倒れようとするスレイに告げた。

「いいな」

「これが運命か」

「全ては何時かは滅びる。神であろうと世界であろうと」

「では貴様もか」

「おそろくな。ではだ」

「さらばだ」

こうしてだった。フレイは背中からゆっくりと倒れた。そうしてそのまま息絶えたのだった、

スルトはそれを見届けてだ。右手に持っていたレーヴァティンを振り上げてだ。地面に向かって投げた。

剣は大地に突き刺さるとそこから燃え上がり炎で世界を覆った。

世界は紅蓮の炎に包まれ息絶えていた者達も何もかもを焼き尽くしていく。スルトはそれを見届けてから何処かに去った。

後には何も残らなかった。焼け跡だけがあった。全てが焼けてしまい何もかもがなくなつた世界だけがそこにあつたのだった。

世界は滅んだ。神々も何もかも。しかしそこに光が差し込めてきた。再び何かが生まれようとしていた。

炎の王はそれを何処からか見てだ。一人呟いた。

「またはじまる。世界が」

そしてその手にはあの剣が戻っていた。世界はまた生まれ息吹きを出しはじめていた。彼はそれを一人何処から見守り。そうして己の役割をその中に見ているのだった。炎の中で。

炎の王 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2557p/>

炎の王

2010年12月1日21時25分発行